



○世間沙汰する大名やのカンチ、いつの夜の露に咲ち吸よか

の調子で唄つて見たら、ごんな者だ、(わからなかつたら見る事は止めろ)

通りでござる、八重山美人(其黄色の黒い)の蛇皮線に泥盛の一杯機嫌、サノサやカシボレ

の發育所として有名な者だが、此島に於ける唯一の俗語「カビラ」節といふのは、正に左の

又前には低氣壓の發生地、マラリヤの本場たる西表島を控え、白緋の製産地、又マラリヤ

沖繩縣で石垣島といへば、與那國島(昔は平家女護島)を除くの外、全縣の最南端として、

琉球の南端石垣島の河平ぶし(一名嘉平)

- 淺間山をば小脇に抱いて昆崙枕で寝て見たい
- どうせ飲むなら只一口口に太平洋をば咽喉のもと
- 地球の奴めを自轉車代り月の世界にチヨト走る
- 加賀の白山今出た計りあすはヒマラヤ峯の月
- 琵琶の湖水で電話をかけりや宵の明星が返事する
- 月の都で夫婦になつて天の河原のホーチムン



上手を過ぎてブルク彼の半風子然として何時もノンキにかぶり付き居る事なく晝は疊の目

机のウシロ等にピツタリと付いて居れど夜は人の寢息きを伺つて衾中に入り生き血を吸ひ

取る危険極まる先生チヤ

○虱

同先生 有名なる酔士、風流人にして半風子 雅號は廣き天下に知らぬ者なき豪ら者なり。

扱て先生の寒がりには又名高いものモ一秋風の吹く節からそろくど逃げ支度行く先さは何

處やら冬籠りと洒落れ、深く閉ぢて影も見せない。やがて芽出度きお正月も過ぎ梅薫り鶯

啼く頃も過ぎし櫻花時からソロくど出懸けて随分花見と洒落れる折もあり五月雨頃には

子も澤山孫も澤山に繁殖して、子供なき婦人連から羨やまれ居るも道理なり夏は隅田や鴨

川と納涼の御多分にも洩れず。情むべし寒がり先生や、秋風立ちし紅葉の錦は知るまいテ。

新 式 壯 快 歌

- 玄海灘から章魚が尻を出して船の馬鹿の〇〇こいた
- 富士の峯には雷めが怒鳴り雲がたまげて小便たれる



(註) カンチとは日本語でいへば、後ろ美人の前鬼人の意、即ち表妻はしつかりわか
らぬが、後ろ姿は程の良い……だトサ

○節よ待召うり時よ待召うり、蓄でおる花の咲かな置ゆめ

○人爲んなさの、よそためんなさぬ、島のある迄やカンドヤヨル

(註) カンドヤヨルは、日本語でいへば、コ、デスヨの意、即ち島のあらん限りはこ
で待つて居るの意

○又も沙汰する後濱やのナビマ、たんことふと宮童と語られ給ふれ

(註) 沙汰するは評判が良い、ナビマは女、以下註は止める

○語られさあきひるか、みはれてさあきひるか、金の屏風おやすて、たしかにおやすん
う

○こかしでんあらぬ、よくしてんあらぬ、新城ひらまん阿波れひらまんしつちゆんとう、

○阿波れひらまんよのひらま、新城ひらまんよのひらま、とふでんやらばん阿波れひらまや
ましたらとう、カンチ

○歌聞ばナビマ聲聞ばカンチ、山あめのひいひいや、ゆねんまゐる。



○天道八幡ナビマ、地獄に落ちてらすカンチおらか上によく肝も、さめてやあらぬ。

○歌の出口や新城ひらまどやよる、またん出口や阿波れひらま、

○大名やのカンチ、島の夫持うか、おあん井の水や、甘水なるはずとう、

○甘水さげなるか、前盛やのあ主か、ふくらしやて思ふか肝の報つかんとう、

○後濱やのナビマ、ふんの夫持か、宇那井の水や、詰酒なる筈とう、

○詰酒さげなるか、慶田盛やのいしとびらくらしやで思ふか、むねの報つくんとう、

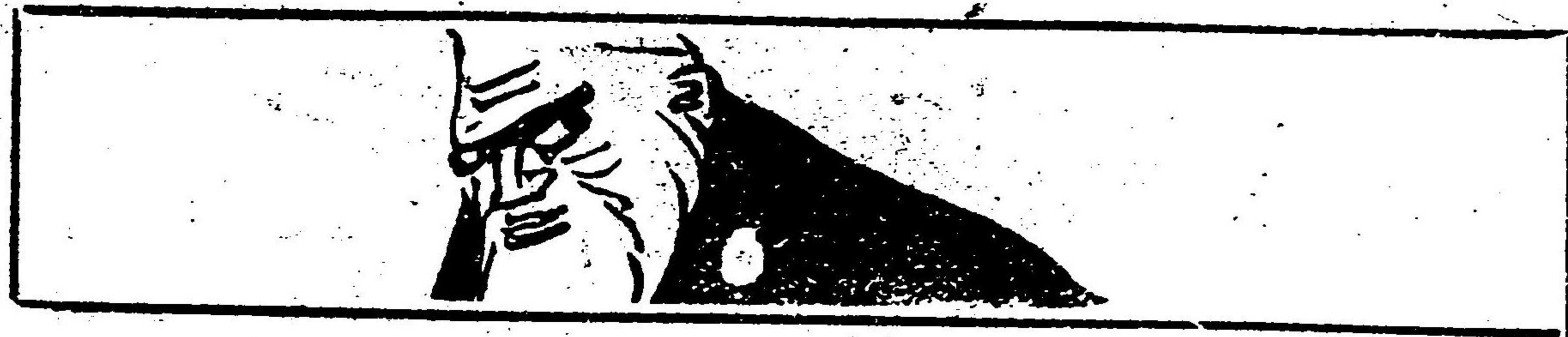
○たんでとうごナビマ、があらとうごカンチ、夜の片時や遊ばれ給ふれ、

○生るかひカンチ、そでるかひナビマ、浮繩まで豊まれいいけいむつぎひら、

軍神の銅像について

江戸川 粹 人

日本でも随分今までの中で銅像が澤山出来た。しかし所謂金佛様で、銅像それ自身は何等の精神も意識もなく。唯市街にニウと起つて居るばかりだが、其さざまれた御當人の人物不人物によつて、此死物が生きかへつて来るので、試に我々の銅像死後、友人中の有志に



よつて或場所へオツ立るとせん。何だ斯んなものと、それこそ市街の邪魔物とされるは必定なり、所で今度縁日の書生節ではないが何だ神田の賽田町へ軍装勇ましく、其昔旅順閉塞の譽榮を負ひながら直立して居るのは軍神廣瀬中佐及び其配下の杉野兵曹長である。しかも日本海々戦の記念日を期して、其姿を露はしたは、をいかに勇士の苦戦の程を忍ばして、華美文藝に流るゝ東都の盛り場の建物としては誠に面白いコントラストであつて、一方飽食暖衣の青年士女、又は少年少女に對しては、武士的教育の一ツともなつて大に欣喜の情に耐へぬ所だ、余は先月三十日寸暇を得たから、膝栗毛に一鞭を加へ、軍神が銅像を拜して、思はず一種の感に打たれ左の狂歌を故事つけた。

死してまでますら武夫の名はくちぢ
實にや肩身も廣瀬榮ゆる

高襟式戀の占

魔風吹く目白の流行

「目白出」云々は縁にするにも一寸首を擡る傾向があると取沙汰するゝ女子大學の數多

奇術者にては此頃各案とも適合させたやうに消燈後又は雨の日の徒然などに互に廂髪を突合せて雜記帳と鉛筆とを取出しヒソ／＼と四邊を憚る小聲して成る戀だの成らぬ戀だのと何やら騒いで居る▲新式の占だつて是は果して何をして居るかと同校の一生徒に訊ねて見るに新式の占だつて得意の色を頬に浮べる此占は疊に一寸流行したことがあつたが昨今又一層の流行を來したもので其方法は目白だけは却々變た者である▲消残る文字 先づ占の方法は自分の姓名とを二列に羅馬字で並べて書く其二つの羅馬字を通じて同一文字を互に消合つて残る文字の數を算へ男が幾つ女が幾つと答を出し一は何、二は何と定めがある若し其答が七を超過する時は又一に歸ることに定めてある爰に一例を示すと伊藤マツと田中清と相思の仲で其行末を占はうとすると前記の方法を違つて見ると M A T S U K I Y I T O K E などで双方に A T S I O の五字が通有であるから互に消されて女の方には二字男の方には八字残るが八字は前記の如く一は復るから男のは一となる▲當るも八卦 次に此結果は何麼して判するかと云ふ一をヂヌライク(Diziko 嫌な人)二をフレンド(Friend) (通常) 朋友位ならと云ふ三をミープ、シメル(Ear-shel 腕の片思ひ)四をラブ(Love 戀)五をキャッチ(Catch 成立) 既に出來て居る意)六をフンライク(Funlike イケ好かない人)



七をマリーチ (Marriage) 結婚) と定め答の数を充て答めるので前の例を此七つの卦に依て鑑定すると女はフレンドで男を友達位ならと思つて居るが男はデスライクで嫌な女だと思つて居ることになる乃で女は消然としてアラ酷いワ人を嫌な女だなんて随分だつと愚痴を零す又自分(女)が四で相手の男が七でもなれば自分は〇、相手は結婚となりアラ一寸大變よ、何? ツテ、非常に好い占なのヨと×××して嬉しがると云ふ騒ぎ

流石に女子の最高學府と威張つてゐる處だけに舊式な淡路島通ふ千鳥の戀の辻占などの比では無い

夫を困らせる良妻賢母

世には云はなくてもよい愚痴を並べ訴へなくともよい不平を訴へ、徒らに夫の感情を害し活動を妨げる婦人が多いやうだ、そして口には、良妻賢母を叫んで居る。洵に夫を助け勵まし子女を訓育するは、良妻賢母には相違ないが、まづ其前に夫を困らせぬ工夫が肝要ではあるまいか、從順にして沈黙、決活にして潔白……これが良妻賢母たる階段の第一歩。徒らに夫を困らせる良妻賢母たる勿れ。



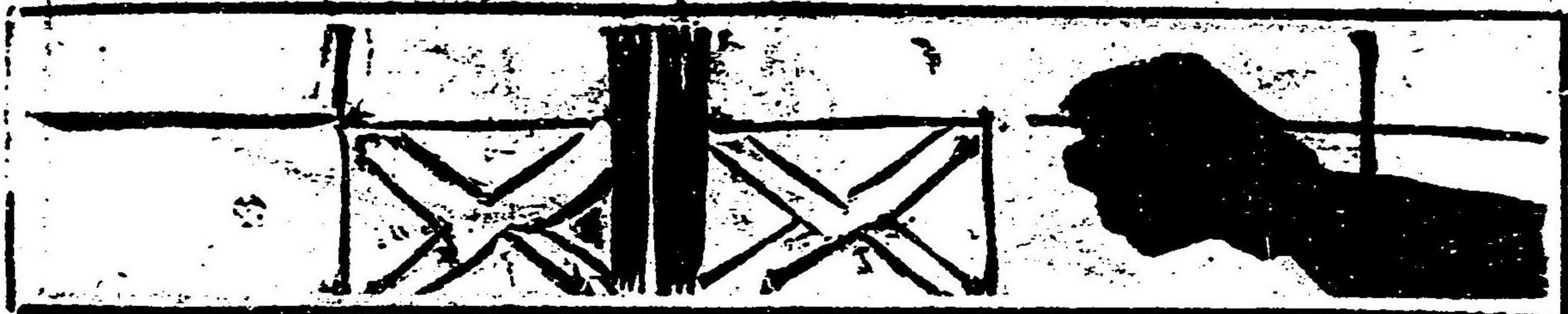
小説愉快

(上)

宮島安藝子

今日は日曜で學校は休みだ、倉田良雄は今朝思の外寝過して、小窓の障子をあける、梅雨の空は昨日と變化はなく、相かわらず、重い氣壓をふくんだ薄黒い雲は、動きもやらずかぶさつて居て、濕氣を帯びた、夜具、墨、何となく、イヤな氣分、頭が重い。大欠伸を一ツして、何の氣もなく机上を見ると、不規則にならべられた書物の上に、一封の書狀が乗せてあつた。多分下女が寝て居る間に乗せて行つたのであらう。國からでも来たものか

と見ると、そうではないが、見覚えのある書風裏を見ると、本郷眞砂町鈴木すま子よりとしてゐる。テツキリ是れは會合の打合せか、それとも何か相談の事でもあるか、何しろ不思議な程胸が踊つた、先づ寢所を上げ、飯でも食つてゆるゆる樂みに讀まうぞ、其儘飛び起きて、布團を形づけ、手早く顔を洗ひ室へ逆ると、下女の奴が妙に笑ひながら膳を運んで来る、そうして人の背中を遠慮もなくポンと叩いて、



倉田良雄此文面を心おちつけ態度がクリ返したが、何とほどこす方法があらう。唯此手紙を顔におしあて、失戀の涙にくれた而して熟考すればする程無限の疑惑心が胸に迫る、それは此文面が果してすま子の事實であらうか、又他に新らしき戀の成立してそれが爲、余を遠ける手段に出たのではないか、モシそうであるとする顔に似合ぬ罪作りな女であるしかし結婚一件の話は前からチラ／＼聞いて居るが、斯う早く進行するとは思はなんだ、何故そうならそうと、無理でも時を利用して、モット前に自分へ相談するが當り前だ是はどうしても一杯喰ツたかな

(下)

「ヤア是れは餘りに殘酷な判断だッ」
 と思はず良雄は叫んだ、何を言ふにも此年二十歳の娘だ、いくら風姿ばかりハイカラでも、父母に逆つて、自由結婚を主張する程西洋化して居らぬ今日、一男子の爲に家の破亂も意にせぬ様な娘があらうかモシモあれば立派な不幸娘で、戀は成立して、徳義に於てゼロと言ふべしだ増して良雄は薄志弱行小膽の青書生だ、先方へ出馬して、其父母に直接面談して能辨を以て説き落し、戀人を乞ひ受けると言ふ程の勇氣もない、ヨシ又それを實行する



勇氣があるとするも、卒業期に迫遠い身、下宿の四疊半にゴロついて居る、音楽學校の一年生、バイオリンの玉子では向が信じて大切な娘をくれやう譯がない、

「ア、總て疑惑だ、……………貫ふ新夫

と我とくらべればムシロ、ア、思ふまい／＼ッ」

と倉田良雄は重いからだを横へた時、モー下女が晝飯の膳を持って来る、起き上つて小窓を覗けば空は矢張り重々しき雲がおひかふさつて居て、晴れ間も見せぬのは丁度良雄が失戀の胸と同じで、不愉快はますます不愉快。人の氣も知らぬ下女は例のトンキヨ聲で

「倉田さん、御飯を召しあがれッ」

「何だ飯、まだ朝飯喰つて間もないのに喰たくないよッ」

「ホ……倉田さん、何ふさいでいらつしるの、アレにさらわれたのッ」

「何だ馬鹿を言ふなッ」

と睨め附けて、食事もせず、横臥態度を續けたが、不愉快な精神はますます不愉快となる空を見れば矢張り曇つて居て、オリ／＼降り来る雨、

「ア、梅は實を結ぶに、我は何時成功の緒に付くかッ」



と涙まじりの欠伸ひとつ、空を舞うのがバカ〜、新しくしてどうやら五月雨の日曜日
終日不愉快に暮しをうけてゐる。

拳骨百話終

明治四十四年五月七日印刷
明治四十四年五月六日發行

定價三拾錢

編纂兼 發行者 大月 隆
東京神田錦町一丁目十六番地



印刷者 青木 弘
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發元 東京神田錦町一丁目十六番地 東京滑稽社

仰天百畫

定價 三十錢
郵税 四錢

諷刺の妙は人を驚倒し、思想の奇は天を驚愕せしむ、一度び本書を繙かば無限の面白味、可笑味にコロくと仰天臺を踏外して肩の凝り立處に臍の邊に飛下り二度び之を讀まば一足飛びに極樂に遊ぶの感あらん、敢てすゝむ人生煩悶苦惱を脱しがたきの士は此書を讀まば、醫藥に優ること數萬倍、偉大なる壯快を得て綽々たる餘裕を生ぜんこと請合なり、本書の効能依て如件

東京神田錦町一丁目十六番地

發行元

東京滑稽社

仰天百畫

定價三十錢
郵稅四錢

諷刺の妙は人を驚倒し、思想の奇は天を驚愕せしむ、一度び本書を繙かば無限の面白味、可笑味にコロくと仰天臺を踏外して肩の凝り立處に臍の邊に飛下り二度び之を讀まば一足飛びに極樂に遊ぶの感あらん、敢てすゝむ人生煩悶苦惱を脱しがたきの士は此書を讀まば、醫藥に優ること數萬倍、偉大なる壯快を得て綽々たる餘裕を生ぜんこと請合なり、本書の効能依て如件

發行元

東京神田錦町一丁目十六番地
東京滑稽社

四十四年文學同志會出版圖書目錄

●美 妙

定價 參拾錢
郵稅 四錢

明治廿七年に版を起して、只今迄に入拾六版五拾四萬部を賣つた本である。日本で此位數の出たのは本書が嚆矢であらう。内容は前篇に聲音、體色、情知、自然、心理、調和、美、妙、を説き、後篇に文學の發達、同目的發達、停滯、論じて、哲學的新智識を興へる。何處讀んでも倦み、論じて、知らない人は早速讀んで見るが長からう。

●人生の初旅

定價 貳拾錢
郵稅 四錢

是は田舎生れの一青年が茫然と志を立てて、東京に出て、千原萬原の苦勞をして、遂に體色滴たる絶世の美人に見染められ、一種の悲劇を生み來つて、而かも其立身出世といふ者かと思ひしむる書である。内實は殆んど著者の實行記録で、小説以上に面白い。

●人生の悔悟

定價 貳拾錢
郵稅 四錢

これは又馬鹿、面白い書だ、父母に別れし悔悟より、婿入りし悔悟、富家に生れし悔悟、失望の悔悟より、學問を學びし悔悟、其他八項合せて七章の珍記事が載つて居る。何人も一度は見て置かぬと、自分も矢張後悔をする事がある。

●人生の老旅

定價 貳拾錢
郵稅 四錢

是は「人生の初旅」の後篇で、前篇を讀んだ人は必ず之を讀まねばならぬ。即ち是一つの実行記録が完結するの

●人生の氣力

定價 參拾錢
郵稅 六錢

是はどんな人でも一度は机の上に於て、沈思熟慮、須らく考へて見るべき書である。人生は氣力を養はざるべからざる事業なり、智識の應用、情慾の應用、人間の目的、人間の事業、人間の本分、完全なる人間となり得る順路、其他官吏、學者、教育家、政治家の標準を説いて筆鋒痛快、眞に身を刺す想ひがある。昔て人間學と題して現れた事があるが、實に人間の聖書である。

●吾家の憲法

定價 卅五錢
郵稅 四錢

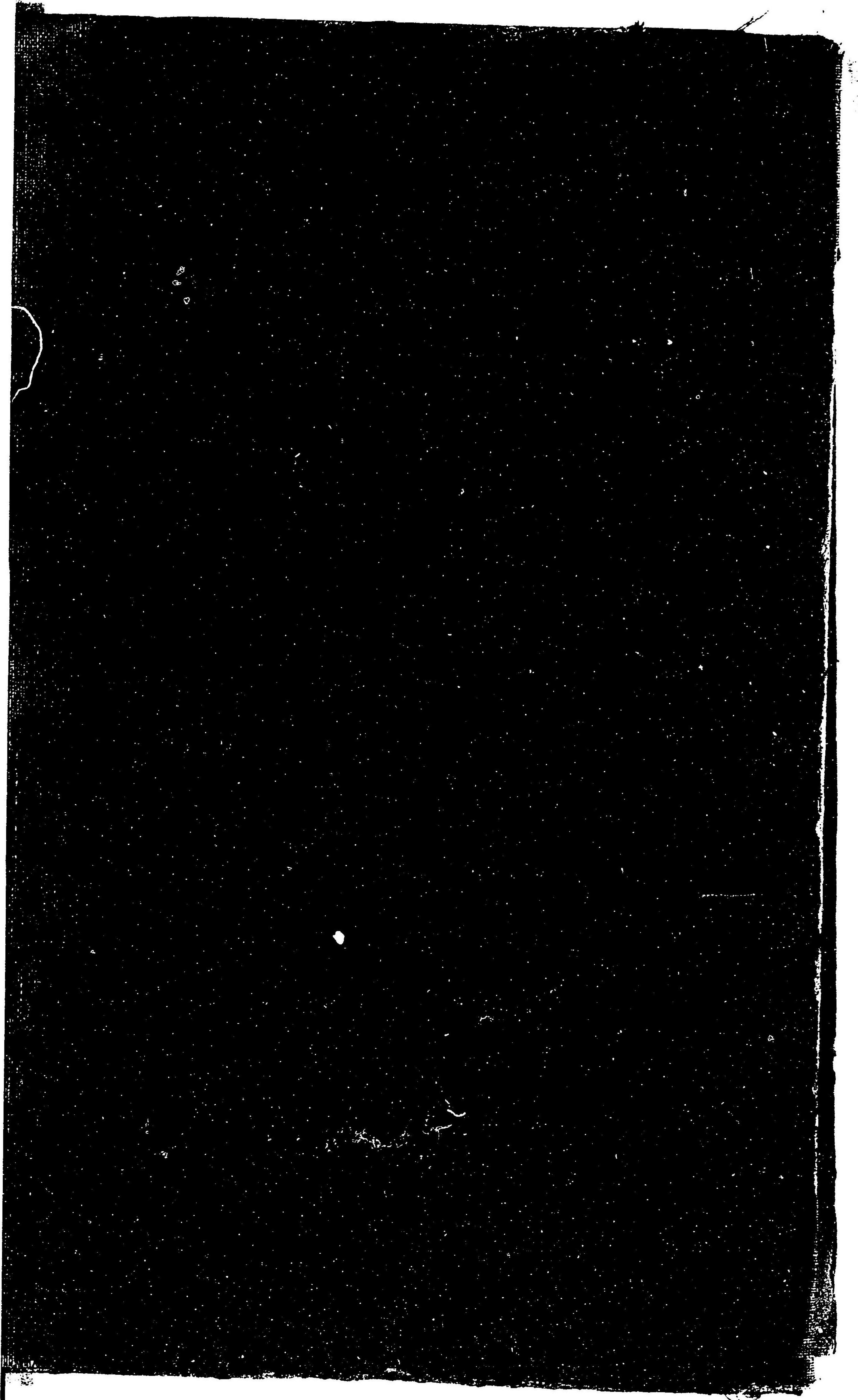
借金を實に置いて學丸を古道具屋へやつても、見なくばならぬのは此書であらう。如何に金を溜めやうとして、吾家の憲法が切實に居つては致方もあるまい。本書は此吾家の憲法を切實に説いた者だ、明治廿八年に版を起して、今に五十版餘に達して居る。殆んど四拾萬人の參考に供してある。

◎最新版目錄

| | | |
|---------|----------|--------|
| ○心學全書 | 定價 貳圓五拾錢 | 郵稅 拾六錢 |
| ○禪畫百譚 | 定價 九拾錢 | 郵稅 六錢 |
| ○仰天百畫 | 定價 參拾錢 | 郵稅 六錢 |
| ○抱腹百話 | 定價 參拾錢 | 郵稅 六錢 |
| ○滑稽百話 | 定價 參拾錢 | 郵稅 六錢 |
| ○成功百話 | 定價 參拾錢 | 郵稅 六錢 |
| ○正文章軌範譯 | 定價 五拾錢 | 郵稅 九錢 |
| ○續文章軌範譯 | 定價 五拾錢 | 郵稅 九錢 |
| ○中等習字帖 | 定價 參拾五錢 | 郵稅 六錢 |
| ○人生の裏面 | 定價 貳拾錢 | 郵稅 四錢 |
| ○女傑俳諧傳 | 定價 參拾錢 | 郵稅 四錢 |

335

201



335

209

039503-000-0

335-209

拳骨百話

大月 隆 / 編

M44.5

BDA-0056



